

エルドマンズデルフェルは熊本時代、『龍南会雑誌』第78号（明治33年5月）に「ジャン＝ジャック・ルソー」（独文）を発表している。ルソーの生い立ちから、スイス放浪生活を経て、自己教育を決意、パリに出てディデロ、グランベールなどの文学者たちとの交流、やがて一生を連れ添うテレーズ・ル・ヴァスールとの出会いまでを描いている。この論文は彼がやがて1900年（明治33）7月末日を以って五高を満期解傭となったので未完に終わっている。

熊本を去った彼は東京に移り、陸軍中央幼年学校のドイツ語教師となった。傭期は、明治33年8月8日より34年3月31日までと短かったが、この時期彼は日本への理解を深めたようである。熊本での苦い思い出も彼を日本嫌いにするとはなかったようである。帰国後、彼は日本に関する文章をいくつか書いているがその一つ、『ヴェステルマンス絵入ドイツ月刊誌』97号（1904）に発表した「東京散歩」（Wanderungen durch Tokyo）は、東京の下町に残る江戸以来の風物や人情を写真入りでスケッチ風に紹介したもののだが、作者が古い日本に対してエキゾチックな興味を持っていたことをよく示している。

さて、エルドマンズデルフェルは中央幼年学校の教師を解傭になった4日後、1901年（明治34）4月4日横浜解纜のケーニヒ・アルベルト号で帰国の途についた。この時、ドイツに留学する大村仁太郎、滝藤太郎、白鳥庫吉、大森英太郎、田中宏らが同船していた。

明治33年当時の五高医学部のドイツ語教育

1887年（明治20）に長崎に第五高等中学校医学部が置かれたとき、外国語としては第一年に英語が課せられたが、これは当時の医学部としては異例である。当時医学部・医学校においては独語が課せられるのが一般的であったからである。英語が課せられたのは第五高等中学校医学部の前身である長崎医学校にアーノルドとアムアットという英米の二人の医学教師が招聘されていたためであろう。というのはこの二人が解雇された後では、英語に代わって医学科については「外国語ハ随意科目トシテ独逸語ヲ四ケ年通シテ毎週三時間ヲ課ス」と定められたからである。薬学科については同じく随意科目として3年間を通じて週3時間と定められた。

ところで『独逸語学雑誌』第11号（明治33年3月15日発行）に「第五高等学校医学部独逸語教科細目」が掲載されている。教科書と担当者を記したものである。当時、五高校長は中川元、医学部主事は村上安蔵であった。

先ず医学科第1年級に対しては、「ボック第一読本購読及文法教科書」、第2年級に対しては「独文読本第一購読及文法教科書及和文独訳」と定め、担当者はいずれも荒間淳吉である。第3年級に対しては「第一高等学校編纂読本第二及第一購読並ニ医学的記事文ヲ筆記訳読セシメ併セテ文法文章論ノ応用ヲ口授ス」とあり、担当者は高屋賀祐。もう一つは「独逸文法教科書講義及和文独訳」で、荒間の担当。第4年級に対しては「医学的記事文ヲ筆記訳読セシメ併セテ文法文章論ノ応用ヲ口授ス」「独逸文法教科書講義及和文独訳」で、高屋の担当。

一方、薬学科は1年級が独逸文法教科書とボック読本の第一、2年級が同じく独逸文法教科書とボック読本の第二、3年級は文法教科書と和文独訳、並びに「化学的記事及薬学的記事ヲ

筆記訳読セシメ且文法文章論ノ応用口述ス」で、これらを医学科と同じく荒屋と高屋が分担して受け持っている。

独逸文法教科書とボック読本が好んで用いられているが、これらは当時高等学校などで広く用いられたものである。前者は明治時代の代表的ドイツ語学者である大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎の編纂になるもので明治27年に初版が出て以来、多くの版を重ね、昭和初期まで「三太郎文法」の愛称でドイツ語学習者の間で親しまれた。前後編の2冊から成るもので、文法知識を確実に習得するのに適した優れた教科書である。設問も確実な文法知識を習得していなければ解答できないようになっている。

ボック読本はヘステル読本に続いて日本に導入されたもので、第一から第四までであった。元来ドイツの小中学校用のリーダーである。ドイツの歴史・伝説・諺・英雄等に関する短い読章がびっしり詰まって内容豊富であるが、全体的に教訓的な話が多い。独逸文法教科書によって文法の基礎を学びつつ、この読本を辞書を頼りに一編ずつ丹念に読んで行けば相当の読解力が養成されたであろう。医学科3年級の「第一高等学校編纂読本第一及第二」というのは、明治28年に南江堂蔵版の「第一高等学校独逸文学科教員撰定」の『独逸語読本』第一巻及び第二巻を指すと思われる。どちらも小本であるが高度で、ボック読本に比較して文学色が濃厚である。医学科・薬学科ともに最上級で、それぞれ医学と薬学のドイツ語文献を読んでいるのは専門学校としては当然であった。全体として読解力養成に主眼が置かれているが、これは専門のドイツ語論文を読むためであったし、次いで和文独訳の練習もかなり行っているが、これは将来ドイツ語で論文を書くための基礎力を養って置こうとの配慮からであったろう。当時、日本の医学者が外国の専門雑誌に論文を発表する場合、独語で書くのが一般的であった。このように五高医学部におけるドイツ語教育では、読む・書くに重点が置かれ、話す・聞くの練習は殆ど行われなかったと見てよいであろう。

手元にある『第五高等学校一覽』（自明治三十年至三十一年）を見ると、医学部の独語教師としては嘱託教員（のち助教授）の中台重躬が唯一人であって、同じく助教授の高屋賀祐はこの時は医学・薬学用の動物学・物理学の担当となっている。ところが中台重躬は明治32年2月に至り非職となり、独語教員に欠員が生じたので、新たに明治32年4月に荒間淳吉（富山県人）を独語授業の嘱託教員に採用した。従って明治33年当時の五高医学部のドイツ語教育はこの荒間淳吉と、専門は動物学や物理学であるがドイツ語も堪能であった前記高屋賀祐が担当することになった。

なお明治34年3月には第五高等学校医学部は熊本の五高から分立し、長崎医学専門学校と改称された。そしてドイツ語教育は時間数も増え、以前よりも一層の充実を見るに至った。

『ファウスト』を最初に訳した酒竹大野豊太

大野酒竹（本名・豊太）は、「俳諧文庫」と「酒竹文庫」（東大付属図書館蔵）により不朽の業績を残しており、俳句作者や俳諧学者でその恩恵に浴していない者は殆どいないとまで云わ